



海の博物館のギャラリーでは、9月3日(土)から11月27日(日)までの期間、津市在住のアマチュア写真家、鼻谷幸太郎さん撮影の写真展「あなた、また来たんか?」昭和の漁民を訪ねて」を開催します。

期間中は3つのテーマに会期を分けて、それぞれのテーマで写真を入れ替えて公開します。※期間中の9月30日(金)と10月31日(月)(両日は休止)に写真を入れ替えます。

会期とテーマ

- 第一期：「浜(うら)と」
9月3日(土)～29日(木)
- 第二期：「浜の子供たち」
10月1日(土)～30日(日)
- 第三期：「浜(うら)景」
11月1日(火)～27日(日)

昭和40年代、鼻谷さんは愛用のカメラにこだわりのモノクロフィルムを装填して、津市の白塚、松阪の狛師町、鳥羽志摩の漁村へと車を走らせました。浜辺・漁村の風景、漁の準備をしている漁民、漁から帰った人びと、海女たちの姿、出会った子どもたちなどを写し撮っています。漁村のかたたちは「あなた、また来たんか?」と言いながら、お葬式やご飯を食べているところも撮らせてくれたといいます。

鼻谷さんが撮りためた膨大なフィルムは、自宅にしまひ込んでそのままになってしまいが、去年、何十年ぶりにフィルムを取り出してデータ化を始めました。それが研究者たちの目に触れて、チョット驚かれることになりました。いまでは見ることでできない漁民たちの仕事ぶりや使われなくなった漁具、失われた浜の風景を生きたままと写し撮った貴重な写真資料の発見とな

なるほど! うみはく
写真展「あなた、また来たんか?」
昭和の漁民を訪ねて」の開催

市立海の博物館 電話 32 6006

vol.16



つたのです。

今回の写真展は、鼻谷さんが写真資料として鳥羽市立海の博物館と三重大学伊勢志摩サテライト海女研究センターに提供した1200点余りの中から96点を選び、先に紹介した3回のテーマに分けて初めて公開する写真の数々です。



写真展「あなた、また来たんか?」昭和の漁民を訪ねて

主催 鳥羽市立海の博物館
特別協力 三重大学伊勢志摩サテライト海女研究センター
会場 鳥羽市立海の博物館ギャラリー

開館時間 午前9時～午後5時

（入場には鳥羽市立海の博物館の入館料金が必要です）

鳥羽・海藻文化革命
**岩尾博士の
海藻博物記**



vol.26
～ナガシマモクの話～
水産研究所 電話 25 3316

今年6月に鳥羽市内で大発見されたナガシマモクについてお知らせしたい。ナガシマモクはヒジキやアカモクが属するホンダワラ科の海藻である。葉の部分が特徴的で、ポートのオールのような楕円形をしており、海底に対して90度ひねったような、つまり藻体を真正面から見たとき、そのオールのような葉の形をはっきりと確認することができ

る。分布域が非常に狭く、紀伊長島から志摩市の大王崎のあたりまでしか生えていないのでは、とされていた。僕も一度、御座白浜で数本生えているのを確認したに過ぎなかった。環境省のレッドリスト(絶滅の恐れのある野生生物のリスト)には「情報不足」というカテゴリーに掲載されている。ちなみに藻類では「絶滅危惧I類」としてアサクサノリ、スイゼンジノリ、マリ

モなどが載っている。現在、市では専門家チームを編成して鳥羽版のレッドリスト(海洋生物)の作成を進めている。その海藻の章にナガシマモクを載せようと検討している際、本当に鳥羽海域には生えていないのか、という疑問が出た。僕はこれまで鳥羽にはナガシマモクが生えていないと思いついており、石鏡や国崎で調査したときでも見つけられずにいたが、今回そのチームの一員である市内在住の佐藤達也さんが石鏡で生えている個体を初めて確認した。その後、海藻チームでも確認し、さらに国崎にも生えていることが分かった(これらの標本も作製)。この海藻が不思議なのは、ほかの海藻のように密で広い群落を形成していないこと。今回もまばらに2、3本ずつ、離れて生えているにすぎなかった。いったいどのように分布域を維持しているのだろうか。まだまだ不明なところが多い魅力的な海藻だ。



カジメの生える岩場の谷にひっそりと揺れるナガシマモク